

# 万葉集解釈の基盤

— 二つの歌の解釈を通じて —

吉 永 登

筆者は、昭和三十一年十月刊行の「解釈と鑑賞」誌上に、中大兄皇子の「渡津海乃豊旗雲爾伊里比沙之今夜乃月夜清明己曾」(万葉集卷一、一五)の歌についての私見を発表したのであるが、これについては少からぬ異論もあったようである。しかし、その後大野晋氏の万葉時代においては「こそ」が「清明こそ」のように文の末尾に来た場合、これを願望の助詞とすべきであり、通説のように単なる強調の助詞とみて、「こそアラメ」の省略形と考えることは誤りであるという考えが発表せられたので、結論的には私見の正しいことが明らかにせられたのであった。

前稿でも触れておいたように、通説の誤りは、歌人としての立場から、歌を美しく解しようとしたための誤りであった。この歌人的直観が尊重せられるべきであることはいうまでもないが、それが歌の解釈にあたつて最終的な決定権を持つと考えるならば、それは大きな思いあがりというべきである。万葉集の歌は決して現代歌人の現代意識による創作ではないのであって、当然時代的背景を無視しては考えられないものである。つまり、いかなる時、どのような条件のもとに作られたかが重要な解釈の要素になるのである。ことに後にも触れるように初期の歌はすべて人事に関するものばかりであるから、その背景を無視して考えることは、きわめて危険であることを知るべきであらう。しかし、だからといって万葉集解釈における歌人の達成を否定するつもりはない。ことにアラギ派の歌人たちの寄与には忘れることの出来ないものがあるのであるが、しかもそれには自ら限界のあることも事実なのである。筆者はここに島木赤彦の「万葉集の鑑賞及びその批評」その他に見られる一、二の誤解を指摘して、一つには万葉歌解釈における筆者の態度を明らかにし、一つには

前稿において紙数の制限のゆえに他日を約束した責を果したいと考える。ただ一言断っておきたいことは、三章述べるところは、前稿を意識したために二章との間に論述の態度に多少の相違があるということである。

二

卷二、一四二番の

家にあれば筥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛るの歌については、島本赤彦はその著「万葉集の鑑賞及びその批評」の中で次のようにいっている。

孝徳天皇の皇子有間皇子が斉明天皇の時に謀反せられたため、紀伊に送られて、藤白に自經せられた。その紀伊道中の歌である。筥は筥であって、食を盛る器である。……草枕は旅の枕詞である。……家にあれば身分相応の食器に飯を盛る。それが図らざる旅の身となって、筥に盛ることも出来ずに、椎の葉に盛ると言うて、忽ちにして身の上の変った歎きを敍べられたのである。……この歌には「盛る」といふ詞を繰り返してゐる。同じ詞を繰り返すのは、子どもの心理に通じた現れである。……当時の素樸さを現す一つの証徴である。(六一頁)

この赤彦の解釈を読む時、赤彦が一応有間皇子がどのような時に作ったものであるかを知っていたことは明らかである。しかし、その解釈は本当にそうした史実に立ったものとは思われない。赤彦は「家にあれば身分相応の食器に飯を盛る。それが図らざる旅の身となって、筥に盛ることも出来ずに」といっている。しかしこれでは、あれば用いるのであるが不自由な旅ゆえそれもならぬといった自由な旅人の角度でしか見ていないことになる。これでは在来の歴史的背景に目をくれない、単に昔の旅の苦しさを読んだものとする解釈とそれほどの距離があるとは思われない。果して、有間皇子にはそうした選択の自由が与えられていたであろうか。次に簡単に当時の皇子の立場について考えておくことにする。



舒明天皇がなくなつて次に即位したのが、皇后の皇極天皇である。皇極天皇はやがて位を退いてその地位を弟の孝德天皇に譲つたのであつた。その時天皇の甥にあたる皇極天皇の長子、中大兄皇子が皇太子として天皇を助け所謂大化の改新を行つたことはあまりにも有名である。それだけに中大兄皇子の権力は天皇をしのぐものがあつた。たとえば、当時都は難波の長柄にあつたのであるが、天皇に大和の飛鳥に遷すことを願ひ出て許しが出ないからというので、皇太子は、母の皇極上皇と妹の間人皇后を引つれてさつさと飛鳥の地に引き上げたごとき、そのもっとも甚しいものであらう。この時の天皇の歌に「かなき付けあが飼ふ駒は引出せずあが飼ふ駒を人見つらむか」というのがある。取り残された天皇の怒りは想像に難くないが、このことが直接の原因とはいえないまでも、事實は間もなくなくなつてゐる。この孝德天皇の皇子が有間皇子であつたのであるから、皇子の皇太子に對する気持がどのようであつたかも、おおよそ見当がつくであらう。齊明四年十一月、再び位についた皇極天皇即ち齊明天皇とともに皇太子の中大兄皇子が紀州の温泉に出かけた時、蘇我赤兄にそそのかされて謀反する氣持になつたのも極めて自然な成り行きであつた。しかるに赤兄は却つて皇子を捕えてその処置を紀州の皇太子に仰ぎ、その指圖によつて、十一月九日に皇子を護送してゐる。今の生駒郡南生駒あたりにあつた皇子の邸から紀州の湯崎まで送られて、そこで皇太子自ら訊問を行つたのであるが、皇太子の問に對する皇子の「天と赤兄と知るのみ、吾はもはら知らず」という答にも十九才の皇子の精一杯の抗議がうかがわれるようである。かくて一通りの訊問が終つた皇子は、再び送り返される途中、十一月十一日に藤代地で殺されたのであつた。数えて三日、その間睡眠もとつたであらうし、また訊問にも多少の時間がかつたことであらう。だからせいぜい三十時間足らずに、七十里ばかりを飛ばすという強行軍で、馬を用いたであらうが、想像を超えた速度であつた。そこには少しもさきの天皇の皇子に對するいたわりなど見られない。問題の歌は、その間に作られたもので、皇子にはもとより食器を選ぶなどという自由はあらうはずもないのである。

當時はすでに紀州への街道はかなり開けていたようで、食器が手に入らなかつたとは考えられないし、第一炊事が行われていたことは、「盛る飯」の形になつてゐたことでも明らかであらう。炊事が行われている以上、食器一つないはずもないのであるが、心ない護送の役人が捕われの皇子に對して人間らしい取扱ひをしなかつたものと考えたい。食えるだけでもお慈悲と思へぐらいの氣持もあつて、ありあわせた椎の葉に盛つて与えたのもあらうか。だから椎の葉に飯が盛れ

るとか盛れないとかは問題でないのであり、また椎でなかったとしても差支えないといえよう。これを歌った有間の皇子には強制の意味の強を椎の中にきかせたと考えることも可能だからである。

ここで改めて皇子の氣持を考へてみることにしたい。皇子の事件は、書紀の一書にも「有間皇子、蘇我臣赤兄、塩屋連小戈、守君大石、坂合部連葉と短籬を取りて謀反の事を卜ふ。」とあって、蘇我赤兄が主謀者の一人であったことは否定すべくもないのである。その赤兄が皇子を捕へているのであるから、今日では多分皇太子中大兄皇子と赤兄とが、あらかじめし合わせた事件ではなからうかといわれている。赤兄のその後の榮達などから考へてもっともな推定であるが、そのことは十九才の皇子もやはり氣付いたことと考へる。万事が計画せられた事件であったと考へれば、護送せられて行く皇子には、あらゆるものが腹立たしく感じられたにちがいない。だから皇太子の訊問に対するつっぱねるような前述の返答も行われているのである。

こうした皇子にも道中、果して実行に移したかどうかは明らかでないが、

磐代の浜松が枝を引結びまさきくあらばまたかへりみむ（卷二、一四二）

の歌に見られるように「松が枝を引結」ぶぐらいの自由はあったものと思へる。しかし、食事は一々護送役人の手をわずらわすことであり、またその意志でどうにでもなったことなのであるから、捕われの人である皇子にはもとより指図がましいことは出来なかつたにちがいない。自由がないだけに皇子の神経を刺戟することも大きかつたはずで、だから目の前に出された椎の葉に盛った飯に對しては、たとえそれが惡意によつてなされたものでなかつたとしても、腹を立てることは極めて自然なことであつた。しかし、若い皇子にも怒りをそのまま実行に移すことは躊躇せられたであらうし、またそれだけの自制力はあつたものと思へたい。問題の「家にあれば筈に盛る飯を」の歌はこのようにして作られたものと思へるのであるが、そこには皇子の心ない役人に對する、後世の言葉でいへば武士の情を知らぬ奴だといった意味の皮肉と、自らのおかれた境遇に對する自嘲にも似た氣持とがこめられているものと考へるべきであらう。繰り返していう。「椎の葉に盛る」といっても、それは決して手近になかつて仕方なく椎の葉に盛つたというような皇子にとつて恣意的なものではないのである。あてがわれたものに對して、さてさて旅というものはこんなにも不自由なものかなあといったぎりぎりの抵抗なのである。

最近になって、この歌が前引「磐代の浜松が枝を引結び」の歌とともに、同じ「有間皇子自ら傷みて松が枝を結べる歌二首」の題詞にまとめられていることから、共に民俗に関連ありとして、飯を盛ることまで祭神の行事であるとする説があらわれている。結び松をそのように解することには異論はないのであるが、飯を盛ることを同じように見ることに賛成出来かねる。飯を盛る他の唯一の例は筑前志賀の海人の歌十首の中、

荒雄らを来むか来じかと飯盛りて門に出で立ち待てど来まさず（巻十六、三八六一）

に見えるものである。この飯を盛るのは、舟出したまま帰らない海人のために家人が蔭膳を据えて、その帰りを待つ歌と思われる。かりに神を祭る行事だとしても、この場合はすでに消息を絶って安否の明らかでない海人の帰りを祈るのであるから、有間皇子の場合とは同じではない。それでは何ゆえ結び松と同じ題詞にまとめられているかというに、多分食事時にかたわらに松があったのを結びうとしたのである。つまり同時に作られた歌だからである。

それにしても、この歌が巻の二の挽歌の部に収められていることは注意すべきである。編纂者はこの歌を単なる旅の苦痛をよんだ歌とは考えていなかったのであって、死につながる挽歌として取扱っている。ここにも赤彦の理解のあまきがあるのではなからうか。

その赤彦はまたこうもいっている。

大凡、万葉を説くもの、歌の直情吐露なると言うて、その表現に主観句の多いを想うてゐるもの多きは、万葉の歌に徹せずして、漫然万葉を説いてゐるからである。この歌にしても、自己境遇の変遷を歎く心が、内に切にして、外に何等の主観句を用ひてはをらぬ。主観句を用ひずして、却って、主観の深く沁み出てゐるを覚ゆるのは、これを写生の心理に通じて考へることが出来るのである。写生を以て没主観なりとて、理智的表現なりとし、甚しきは芸術上の啓蒙運動なりなど説いてゐるものは、有間皇子のこの歌に対しても、同じく理智的であり、没主観であるとするであらう。さういふ浅解者は語るに足らないのである。（万葉集の鑑賞及び其批評 六二頁）

これを読んで赤彦の写生道の幅の広さを知ることが出来る。しかし、「自己境遇の変遷を歎く」というあたり、理解の不足はおおうべくもないのである。この歌はどこまでも所与の中での抵抗であり、決して所謂旅人の立場から自己の意志をもってした描写ではない。本来、赤彦の作歌に対する立場は所謂鍛錬道であって、きわめてきびしいものであり、そ

れだけにゆるぎのないものであった。しかし、それはどこまでも赤彦の立場であって、必ずしも万葉歌人のそれではないのである。赤彦的立場によって作られていないものを、その立場から眺めるのであるから、時あつてずれの生じるのも当然であろう。これもその一例ではないかと考える。

ところで、ここで考えなければならぬのは作者の意図必ずしも読者の共感をよぶとは限らないということである。作者の意図がどのようなものであつたにせよ、表現面にそうしたものがあらわされていなくするならば仕方がない。が、だからといって作者の意図とは遠いところで喝采するのも喜劇以上の何物でもないのである。

また、こうも考えられるであろう。即ち皇子の歌は本来赤彦的立場にあつてよまれた皇子ならぬ別人の歌であつたのが、作者を失つて、たまたま皇子の作となつたとするのである。もとよりありえないことでもなからうが、しかし今の場合には何の証拠もないことであり、すでに皇子に結びつけた人の意識には明らかに赤彦的でないものがあつたというべきであろう。

### 三

卷一の斉明天皇の時代の歌に有名な三山の歌がある。

#### 中大兄三山歌一首

香具山は 畝傍男々しと 耳成と 相争ひき 神代より かくなるらし 古へも しかなれこそ 虚蟬も つまを  
争ふらしき (卷一、一三)

#### 反歌

香具山と耳成山とあひし時立ちて見に來し伊南国原 (二四)

渡津海乃豊旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜清明已曾 (一五、「沙之」元曆校本、類聚古集「彌之」、西本願寺本等「禰之」但シ訓ハ元曆校本、類聚古集等「さし」トアリ)

右一首歌今案ずるに反歌に似ざる也、但し旧本此の歌を以って反歌に載す、故に今猶此に載するか、……  
これら三首の中最後の歌については左注でもすでに疑っているように、反歌と見ることに問題がある。しかし、新註

の多くは一応本文を尊重して反歌の線に沿って理解しようとしたのであった。だからそのために「三首共播磨での御作とすれば、無理なく解される」(佐佐木評釈 巻第一、二四頁)という立場をとらねばならなかったのである。

ところでこうした説は数的には有力であるにもかかわらず、強引にすぎることを知るべきであろう。その一つの理由は、中大兄皇子が斉明天皇の時に播磨に出かけた様子がないことである。斉明七年、中大兄皇子は天皇と共に新羅を討つために九州に軍をすすめている。この時は一月六日に難波の三津を出帆して、八日には備後大伯即ち今の牛窓の海上、十四日には伊予の熱田津についている。途中播磨に上陸した様子もなければ、またその可能性もない。帰途も同様で、天皇の喪を秘したまま、翌八年の十月七日に博多を出帆し、二十三日には難波の港に帰りついたのであった。もとより播磨上陸の記事も見えないし、そんな余裕のある船旅でもないのである。

そこで、後岡本宮即ち斉明朝の枠をはずすとすれば、舒明天皇十一年の行幸の度が考えられるのであるが、この時は中大兄皇子は二十六七歳で、もし行を共にしていたら途中播磨に立寄ったかもしれないのである。しかし、釈日本紀に引かれている道後温泉の碑文によると皇子は随ってはいなかったように思われる。同碑文には歴代の天皇の五度の行幸のことが記されているのであるが、最後の度のは前記斉明七年のこと、

後岡本天皇、近江大津宮御宇天皇、淨御原天皇の三軀をもつて一度となす。

といっている。この近江天皇、淨御原天皇がそれぞれ中大兄、大海人の二皇子であって、当時はまだ天皇の位についていないのであるが、後の即位を前に及ぼして天皇といっているのである。しかるに、四度目の舒明天皇の度のは、ただ

岡本天皇並びに皇后二軀をもつて一度となし

とあるばかりである。もしこの時、中大兄皇子が同行しているならば、当然五度目のように近江天皇の名が見えるべきで、その名が見えないことこそ、皇子が一行中に加わっていなかった証拠であろう。

また、播磨風土記に天智天皇の巡幸記事のないことも注意すべきである。風土記の性質からいっても、天皇、皇太子に関する記事を洩らすことはまずあるまい。以上、何れの点から考えても中大兄皇子が播磨の地を踏んでいる様子がないのであるから、播磨にあったの作とする通説は今一度考えなおす必要があるのではなからうか。

通説のあたらない今一つの理由は、反歌一般の性質から考えた場合にも生じるものである。即ち万葉集においては、反

歌は長歌の内容を簡単に繰り返すか、もしくはいい足りないところを補うかの二つに限られている。したがって問題の歌を反歌とする時、その何れにも当らないことは明らかで、編纂者さえ疑っていることは左注に詳しい。これを反歌と見ないものは代匠記をはじめとして古註の多くがそれであり、新しいものにも全釈などがある。しかし、新註の多くは本文を尊重して反歌として理解しようとしていることは前述の通りであるが、今やその根拠を失ったのであるから、改めて考え直すべきであろう。

もともと、誤りは偶然にしかもしばしば生じるものであって、編纂者がすでに誤りでないかといっているのは、当時の有力な解釈を示しているものであることを忘れるべきでない。だから、本文尊重のあまり、正しい批判を無視することは考えもので、共に中大兄皇子の作であることから、隣りあって書かれていたものが、何かの機会に題詞を失って、反歌のような形になったものではなかるうか。ことに長歌の題詞に「三山歌一首」とあって、反歌の数に及んでいないのは、まぎれる可能性の多いことを示している。

さて、上述のようにこの歌を三山歌から切り離したとして、その解釈をどのようにすべきであらうか。在来、この歌の定説的な解釈は、切り離すか離さないかの区別なく、

海の上に棚引いた立派な布のやうな雲に、入日の光が映って、実に美しい景色だ。この様子では、今夜の月はきつと澄み渡って佳いに違ないよ。(全釈第一冊、三〇頁)

といったものであった。即ち「入日さし」を「入日さしヌ」と解し、「清明こそ」を「清明こそアラメ」のアラメの略された形と解したのである。しかしこの解に対しては異説もあって、例えばすでに古義では

此の風景のおもしろき海浜にして、今夜の月見むとおもふ時しも、入日の空に心なく雲の棚引よ、かくてこよひの月もさやかならじを、いかでかの入日の影のこころよくてりて、雲もはれてゆき、今夜の月しもさやかに有れかし。

……(普及版、一、三三八頁)

のように、「入日さし」を何処までも中止法と見て下の「こそ」にかけ、その「こそ」をも願望の助詞と解している。二つの解釈をくらべることによって気づくことは、一つは「入日さし」を「入日さしヌ」と解するか、中止形として下の「こそ」にかけるかの相違であり、他は「こそ」を「こそアラメ」と解するか、願望の助詞と見るかの相違である。し



かし、文法的にいえば当然中止法として下の「こそ」にかけるべきであることは、前章に引用した「岩代の浜松が枝を引結びまさきくあらばまたかへりみむ」の例をみても明らかであろう。即ちこの歌は

……引き結（び）バ

……またかへりみ↓む　であって

決して、……引き結びヌ……またかへりみむ」でないことは諸註例外がないのである。

しかるに、今の場合に通説がこれを否定するのは

（「こそ」を）若し願の意とせば、上は動詞存在詞の連用形を以てせざるべからず、かくて「きよくてりこそ」などいふよみ方も出できたるなれど、さる時は「入日さし」をも願ふ目的にせずは、上下うち合はず。入日さしをも願ふ意にせば、この歌何を見てよめりやもわからぬこととなりて全く意をなさぬなり。（講義卷第一、九一頁）

といったように、「入日さし」を下にかけると現実に豊旗雲に入日の美しくさしている様子を見てとの映像が消えるからなのである。しかし、いくら美しい映像が消えるからといって文法を無視することは問題で、こうした破格の例があるかどうかは当然考えなければならぬことである。この点、多少とも触れているのは井上通泰の新考だけといえようか。

新考は

月のあからむ事を望むが目的にて其仲介として雲に入日のささむ事を望むならばわたつみのとよはた雲に入日させこよひのつくよあかくてるがねなどいふべく今の如くにまぎらはしくはいふべからず。……又イリヒサシといへるは古格にて今ならばイリヒサシヌといひ切るべきをイリヒサシといひすてたるにて古今集なるカリクラシタナバタツメニヤドカラムのカリクラシと同格なり。（新考第一三二頁）

といっている。まぎらわしいいい方はしないだろうというのも勝手ないい分だが、何よりも大きい誤りは例に引いている古今集の「狩り暮らし」を「狩り暮らしヌ」と解していることである。この歌には当然といながら下の句があって、全体は「狩り暮らし七つ女に宿からむ天の川原に我は来にけり」となるのであるが、この訳は

いっその事今日一日を此処で狩り暮らして、棚機様に今宵の宿を借らうぞ、歩きまはって、丁度幸ひ棚機の居る天の川の川原に、思ひかけず来たわい。（金子元臣、古今集評釈、四九三頁）

につきてゐる。「狩り暮らし」はまだ狩り暮らしてはいないのであって

狩り暮ら（し）サ

棚機つ女に宿借ら↓む

の關係にあることは明らかであろう。だが、註釈家というものは勝手なもので、同じ金

子氏が自らの万葉集評釈の中では新考の説、即ちこの歌を例に引いて「入日さしヌ」と解しているのだから始末が悪い。結局正しい語法的説明をしているものは一つもないのであるが、このような強引さはどこから来るかというに、さきにもいったように破格と解しないかぎり、歌としてはつまらぬものとなるというにある。島木赤彦は次のようにいっている。

……海上遙かに棚曳ける豊旗雲である。それに入日が刺してゐる。これだけで、如何にも壮大雄偉の感が起る。四五句更にそれを受けて、「今夜の月夜清けくこそ」と言うてゐる。……この下二句、今宵の月夜は清明けくこそあれ。

（吉永云う。「こそあらめ」のつもりで、命令の意ではない）と断定してゐるのであって、上句の壮なる勢を受けて、大磐石の如く据わり得てゐるといふ感がある。……境は海浜である。海上遙かに豊旗雲が棚引き、それに夕日の光がさしてゐる。今夜の清明なること想ふべしと断定してゐるのであって、気宇の広潤雄大なること、多く比を見ないほどの歌である。第三句「刺す」と言はずして「刺し」といふ中止法を用ひて、語を言ひさしにしてゐる。さういふ所がこの歌を大柄にしてゐること、作歌者の特に注意すべき所である。歌を大柄にしようとして「刺し」を用ひたのではない。大柄な気宇が自然に斯様な句法に到達せしめたのである。この關係は、歌の根本問題となるべきものであって、更に深く作歌者の心を致すべき所であらうと思ふ。この歌、実に中大兄皇子の大化改新の大業を成し遂げられた高壮なる気宇を想見せしむるに余りあるほどの御歌であつて、或説の如く、この歌他よりの竄入であつて、中大兄皇子御作であるまいとするが如きは、小生の取らない所である。万葉集を通じての秀作であらう。（万葉集の鑑賞及び其批評、七四頁）

これによると「刺しヌ」の意のところに「刺し」とあることは破格であるとさえ考えていないようで、一首がすぐれてゐるためには当然そうあるべきであるとの意見である。こうなれば「刺し」の語法上の論議など問題でないのであつて、しばらく冷却期間をおくことにして、他の方面から考へて行くより外はない。

通説では前述のように、旗雲に入日のさしている状況を眺めて、今宵の月は美しくあるだろうと歌っていることにな

る。これによると下の句は一応情意による判断にはちがいないが、夕方横雲に入日がさして夕焼けすれば暗夜であるとする経験——朝焼け門を出でず夕焼け遠く走るともいう——がいわせるもので、そこには主観の入り込む余地はない。したがって全体は客観的な叙景歌ともいふべきものである。ところでこのような叙景歌的なものが斉明天皇の頃にあったであろうか。

当時の人が景色の美しさにうたれたことはあったであろうが、これを歌という形式で表現するにはなお時が要したのではないかと考える。当時の歌はまだ生活と密接したものであって、景色の美そのものを歌ったものは見当らない。念のために土屋文明氏の万葉集年表によってしらべることにする。

1、仁徳朝の七首、(八五—九〇、四八四) いずれも妻が夫を恋する歌

2、允恭朝の一首、(三二六三) 夫の妻に対する愛情を歌ったもの

3、雄略朝の三首、(一) 妻問い、(六六四) 鹿を思う、(三三三一) 挽歌

4、推古朝の五首、(四一五) 挽歌、(三二四二) 山路の難渋を歌う、(三三六〇—六二) 恋愛の歌

5、舒明朝の一五首、(二) 国見の歌、(三、四) 狩猟中の天皇への献歌、(五、六) 旅で家を思う、(四八五—八七

三二六八・六九) 人を思う、(一五一—) 鹿を思う、(三三一四—一七) 夫婦間の問答

6、斉明朝の一三首、(七一—二、一六六五・六六) 旅情、(一四一、四二) 自らの悲運を歎く、(一三一—一五) 問題

の歌を含む三山歌

7、天智朝の四〇首、(一七・一八) 故郷を偲ぶ、(一九—二一、九一—一〇二、四八八・八九、一四一九、一六〇・六・

〇七、三二九三・九四) 恋愛歌、(一四七—一五五) 死に関するもの、(一六) 春秋の優劣を判じたもの

8、天武朝の三五首、(二三九) 譬喩歌、(四二六〇・六一) 頌歌、(二二) 若さを讃える、(一〇三・四、一〇七—

九、四九〇・九一、三八〇七、三二四五—四七) 相聞歌、(二三・四) 流謫に関するもの、(一五六—八) 死に関

するもの、(一五九—六一、一六三—六六、四一六) 挽歌、(一〇五・六) 人を思う、(二七) 旅情に関する歌、

(二〇三三) 七夕の歌、(一五—二) 雨をいとう、(三八八六) 乞食の歌と夏雑歌に分類せられている

霍公鳥いたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに(巻八、一四六五、藤原夫人作)

の一首とである。

右のように、何れも例外なく人事もしくは叙情に関する歌ばかりであって、叙景的な歌は見られない。持統朝になってはじめて有名な

春過ぎて夏来たるらし白妙の衣ほしたり天の香具山（卷一、二八）

の歌が見られるのであるが、これとて祭の歌であるとする説もあって純粹叙景歌と見ない人もあるようである。しかしたとえ叙景歌と見ても作られた年代は大体藤原宮遷都後とせられている。斉明朝との間には四十年ばかりの開きしかないが、実はこの四十年こそ中に壬申の乱を経験していることを知らねばならない。壬申の乱はあらゆる方面に著しい変化を来した時期で、すでに人鷹なども活動をはじめ、歌の世界にもようやく新しい傾向が見えている。だから叙景的な歌もあらわれているのであるが、しかし極めて少数で、大勢は依然として人事関係と叙情に関するものであることはいうまでもない。

斉明朝の歌にはまだ叙景的なものがないこと上述のようであるが、恐らくこうした考えに立ってであろう、折口信夫博士は

後世の或人、たとえば高市黒人の様な人が、播州の旅行中に作った歌を三山歌の縁で、攪入したものであらう。

（口訳万葉集上、七頁）

といっている。高市黒人といえ

何所にか船はてすらむあれの崎漕ぎたみ行きし棚無し小舟（卷一、五八）

などの歌があつて、いかにも叙景歌人としてふさわしい。しかし折口博士の考えは一方的で、問題の歌を叙景歌ときめてしまっていることに考える余地があるのである。というのは、作者中大兄皇子を動かさないで、歌を人事に関するものとして解決する方法があるかもしれないからである。

問題の歌を人事に関する歌とするためには、「こそ」を願望にとって「あの旗雲に入日がさして今宵の月が清明であつてほしい」と解するより外はない。前稿で播磨の海岸にあつての作であることを否定した筆者は、これを斉明七年西征の途上の歌と解したのであつた。地中海の古代にあつては航海は夜が選ばれている。夜は陸から海に向つて風が吹くために

帆をやるに都合がよいからだそうで、古代の瀬戸内海の航海が同じであつたかどうかは明らかでないが、斉明七年の西征に夜の航海が用いられていることは、額田王の

熟田津に舟乗りせんと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな（卷一、八）

の歌で知ることが出来る。どこかの港にあって事実上の指揮者中大兄皇子はやはり夜の航海を考えている。夜の航海であるから月明であることが何よりも望ましい。夕焼けさえすれば晴天なのだ。そのためにはあの旗雲に入日がさして夕焼けがしてほしい……と解すれば十分に人事に関する歌として理解出来るように考える。これを「何を見てよめりやもわからぬ」と解することこそ受取れないのであって、歌柄の高下はともかくとして、それなりに十分筋の通つたものと見るべきではなからうか。この一連の歌を斉明七年西征の帰途海上での作としたものに尾山篤二郎氏の考えがある。

以上の推定を更に決定づけてくれたのは前にも触れた大野晋氏の昭和三十一年十月号の「解釈と鑑賞」誌上で示された見解である。即ち氏は用例から帰納して「清明こそ」のように文末に来る「こそ」は上代では悉く願望の助詞と解すべきで、「こそアラメ」の如き強意の助詞のアラメが略された形と見るべきでないといっている。「こそ」が願望と解すべき以上、通説はもはや成立しないことになり、この歌は当然

海の上に大きな雲が広がってゐる。その雲に落日がさす位の天気になって、今夜の月は明らかであつてくれ（口訳万

葉集上、七頁）

と解すべきことになる。もとよりこのように解することは歌柄を低いものにするかもしれない。しかし、万葉集の歌は何も歌柄が高いものとはかぎらないのであって、歌柄を高くするために本来の意味から逸脱することの方がむしろ本末顛倒というべきであらう。まして赤彦のように誤った解釈の上に立っていくら力んでみたところで、力めば力むほど滑稽以外の何物でもないのである。

最後に大野晋氏が、第三句を元暦校本や類聚古集の古写本に「弥之」とあるに従つて、「入日見し今宵の……」と解している点について考えておくことにする。これを「見し」と読むことは古写本尊重の立前からもたしかに一案であらう。しかも問題の「さし」を一挙に乗り込ませて、現実に見ていることにもなるのである。しかし、「見し」は連体形であらうから当然「今宵」を修飾することになって、歌を作った時は今宵になるのである。入日を見るのは夕方であらうから、こ

の矛盾をなくするためには「夕方入日のさすのを見た今宵ただ今は」と解するより外はない。果してそれでよいのであろうか。筆者にはやはりこの歌は夕方の作と見て、やがて夜になるが、と解すべきではないかと考えるので、この点大野説に何かついて行けないものが感じられるのである。これは沢潟久孝博士の「万葉集古径三」における古写本が文字とは別に何れも「さし」と訓んでいることによって本来「紗之」とあったものが、「弥之」とも「禰之」とも誤ったものであらうとする推定に従って「さし」の訓を採用すべきではなからうか。

以上筆者の考えは大体のべたつもりであるが、万葉集中の名歌を抹消したというそしりを受けることになるかもしれない。しかし、筆者のように解することもまた出帆に際して船——というよりも朝鮮征討の一大船団全体——の安否に思いをやって、指揮者中大兄皇子が月明を願う気持をあらわしているとはいえないだろうか。しかし、この解も実は一つの仮定に立っていることは否定すべくもないのであるが、これは題詞を失った歌にとっては止むを得ないことと考える。

(一九五七・一・二〇)

## 追記

齊明七年一月、西征の途、播磨に立寄つたと考えても、六日に難波三津(大坂)を出帆し、八日にはすでに備前大伯(岡山県牛窓)の海上に出ているので、七日のこととなる。七日の夜の月は次の図の程度の月で、とても「今宵の月夜清明」などとはいえないのではなからうか。



七日月